

WAIC 2026: AI「産業競争」時代の幕開け

— 三層のパラダイムシフトと日本企業の生存戦略 —

AIの競争軸は「モデル性能」から「社会・物理システムへの統合」へシフト

AIパラダイムの三層構造 (システム間連携の新たな戦場)

第一層: 計算インフラの「トークンファクトリー」化

単体チップ性能ではなく、システム全体の生産効率を競う大規模クラスターへの進化。

第二層: 自律型AIエージェント (Agentic OS) の台頭

チャット形式から、目標を与えれば自律的に推論・実行する専用OSへの変革。

第三層: 物理世界への実装 (エンボディドAI) の急加速

200社以上のロボ企業が集結し、AIが工場や物流での「実用的な労働」を開始。

間連携の新たな戦場)

日本企業への3つの提言



「使うAI」から
「業務に組み込むAI」への脱却
AIをチャットボットとしてではなく、社内システムと繋がるAgentic OSとして再設計する。



フィジカルAIにおける
「日本の信頼性」の再定義
強みであるハードウェア制衡とAIを融合させ、不可欠なコンポーネントとしての地位を確立。



中国製オープンモデル (Kimi K3等) の厳格な評価
低コスト・高性能の一方で、高いハルネーション率やIPリスクへの法的対策が必須。

第一層:
計算インフラの
「トークンファクトリー」化



曙光8000 (中科曙光)
10万カード級の完全国産AI
スーパークラスター。

第二層:
自律型AIエージェント
(Agentic OS)
の台頭



STEPX Neo (碁曜星辰)
AIエージェントをOSレベルで
ネイティブ統合したスマホ。

第三層:
物理世界への実装
(エンボディドAI)
の急加速



遠征 A3 Ultra (智元識艱人)
51自由度を持つ自律動作型
ヒューマノイドロボット。